

表紙作品解説



桜図下絵 一幅 跡見花蹊筆

128.0×53.0cm 紙本彩色

跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵

校章や校歌「花桜」に表されるように、桜は本学にとってのシンボルである。跡見花蹊は春になると桜を愛で、その美しさを和歌に詠んだ。書画を教授する生徒たちに与える手本には、桜が含まれるものの、現存する桜図は意外に少ない。本作は10枚の紙を繋ぎ、背後の木の幹と二手に伸びる枝で構成された作品である。

幹は全体のバランスを整え、かつ奥行きを持たせる効果をあげている。しかし跡見花蹊にとって桜花こそが表現したいものだったのだろう、透き通るような花卉や色鮮やかな蕾、若葉の様子などを精緻に描いている。

桜の花の持つ魅力に、誰もが一度は胸をうたれたことがあるだろう。本作からは、満開の桜から跡見花蹊が受けた感動が直に伝わってくるようである。

写真提供：跡見学園女子大学花蹊記念資料館

文：学芸員 渡辺 泉